

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：32630

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370949

研究課題名(和文) メディカルツーリズムとしての不妊治療に関する文化人類学的研究

研究課題名(英文) An Anthropological Study on Infertility Treatments as a Form of Medical Tourism

研究代表者

上杉 富之 (Uesugi, Tomiyuki)

成城大学・文芸学部・教授

研究者番号：00250019

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の主要な成果は以下の点を明らかにしたことにある。(1)「ポスト生殖革命時代」の今日、卵子提供や代理出産等の先端的不妊治療はメディカルツーリズムの一種として実施されている。(2)先端的不妊治療によって生まれた子は「多元的親子関係」を持つことがあり、その場合、関与する家族は「相互浸透的家族」となる。(3)米国のLGBTカップルは「共同養育」(co-parenting)という新たな子作り/子育てを試みており、そこに関与する者は「拡大家族」(extended family)を形成する。(4)日本のLGBTカップルも、意図や自覚はしていないものの、すでに「共同養育」を実践しつつある。

研究成果の概要(英文)：The following are the main research findings: (1) In the age of “The Post-Reproduction Revolution,” when advanced assisted reproductive technologies (ARTs) such as egg donation and/or surrogate birth have become a normal practice, these technologies are often carried out as one kind of international medical tourism; (2) A child, who is born by ARTs with the involvement of a person other than a family member, may have “multiple parent-child relationships” beyond the original family, and, as a result, the two or more families involved become “mutually infiltrating families”; (3) Some LGBT couples in the USA “co-parent” children. In such cases two or more adults work together to give birth to and/or raise the children even though all of them are not necessarily the biological parents. Those parents and the children form “extended families”; (4) Some LGBT couples in Japan have also, without fully recognizing the meaning of their practice, started “co-parenting.”

研究分野：社会人類学

キーワード：メディカルツーリズム 不妊治療 タイ アメリカ LGBT クイア(queer) 親子 家族形成

## 1. 研究開始当初の背景

近年、世界的な規模で親子・家族・結婚観や制度が大きく変動している。例えば、社会学者の J. J. Macionis & K. Plummer (*Sociology: A Global Introduction*, 2012) らは、家族のあり方は、「家族である」(being family)から「家族をする」(doing family)、あるいは「家族になる」(becoming family)へと移行したと指摘する。すなわち、家族はア prioriに存在するのではなく、日々の家族としての実践の積み重ねが家族を作るといのである。また、同性愛者が形成する家族の研究を行った K. Weston (*Family We Choose*, 1991) や V. Lehr (*Queer Family Values*, 1999) は、男と女が結婚することによって作る家族は今や「選択」されるべきさまざまな家族の中の一形式に過ぎないと主張する。さらに、J. Carsten (*Culture of Relatedness*, 2000) は、親子や家族関係は、かつて信じられていたように生物学的紐帯(血やDNAなど)や法的紐帯に基づくというよりも、むしろそれをも含んださまざまな関係性(relatedness)の中で理解されるべきだと結論づける。こうした議論の根底にあるのは、親子・家族・結婚はすでに出来上がったものとして存在しているのではなく、私たちが日々の生活の中で維持したり作り直したりするからこそ存在しているのだ、あるいは、そうあるべきだという考え方に他ならない。

このような親子・家族・結婚観の変動をもたらした要因の一つは、かつて「生殖革命」(The Reproduction Revolution)とも言われた、体外受精や胚移植技術等の先端的生殖技術を用いた生殖補助医療の急速な進展と拡大・普及である。今や生殖補助医療は欧米先進国や日本のみならずシンガポールやインド、さらには中東や南米の発展途上国にまで拡大・普及している。そして、生殖補助医療のグローバル化はただ単に生殖医療の問題にとどまらず、親子・家族や結婚観や制度のあり方を根底から変革しつつある。

以上のような問題意識に基づき、報告者は2000年度以来3期にわたって科学研究費補助金を用い、グローバル化する生殖補助医療の実態とそれに伴う社会や文化の変化、特に親子・家族・婚姻観ないし制度の変化に関する調査研究を実施してきた(第1期:「新生殖医療技術に関する社会・文化的対応の国際比較」、2000~2002年度、第2期:「新生殖医療に起因する国境を越えた社会・文化的諸問題の実証的研究」、2004~2007年度、第3期:「新生殖技術の実用化に伴う親子・家族・婚姻関係の再編に関する国際比較」、2008~2010年度)を行った。

ところで、以上3期にわたる科研費研究プロジェクトを10年間にわたって実施する間に、生殖補助医療をめぐる社会的・文化的な環境ないし状況は大きく変わった。先端的生殖補助医療(技術)の世界的な認知・容認と、そ

れに伴った生殖補助医療のさらなる普及・拡大、商品化である。まず、世界で初めて体外受精児を誕生させたイギリスの医師 R. エドワーズが2010年にノーベル生理学賞を受賞し、体外受精・胚移植技術並びにそれを実用化した生殖補助医療は世界的に認知・容認されることとなった。それと相前後して、先端的生殖補助医療を用いた不妊治療が韓国(大韓民国)やタイ(タイ王国)等の言わば生殖補助医療新興国で観光と結びついてメディカルツーリズムとして商品化され、日本を含めた世界中の不妊治療患者(客)を呼び寄せるようになった。

そうした中、報告者は2012年2月、生殖補助医療のグローバル化に関する予備的調査研究の一環として、日本人不妊治療の渡航先として人気の高い韓国を訪問し、ソウルの不妊治療幹旋会社(Medical Seoulなど)で聞き取り調査を実施した。その結果、これまでほとんど報告のなかった以下のような事実が明らかとなった。すなわち、1つには、韓国では、観光産業振興政策の下で、不妊治療を含めた各種医療の幹旋は今や医療単独としてではなく、韓国の名所・旧跡や劇場、免税店等を巡る観光と抱き合わせにしたメディカルツーリズムとして行われているという事実であった。そしてまた、不妊治療患者と卵子/胚提供者が時として韓国でともに生活をし、治療の空き時間にいっしょに観光を楽しむという事実であった。2つ目として、不妊治療の開始に当たり、韓国の法律や医師会のガイドラインに基づきつつも、日本人患者と卵子/胚提供者、現地のコーディネーター、家族カウンセラー、医師、看護師、弁護士らが事前に話し合い(交渉し)、それを通して治療によって生まれる子の親子関係や家族関係にかかわる合意を随時形成しているらしいということも明らかとなった。そして、3つ目として、2010年末の不妊治療幹旋関連法の改正以降、日本人不妊治療患者のかなりが韓国ではなくタイやアメリカ(ハワイ)に渡航しているらしいということも判明した。要するに、グローバル化する生殖補助医療(不妊治療)は今や韓国やタイなどでメディカルツーリズムとして行われており、また、そうした不妊治療の実践を通して親子・家族、さらには結婚観や制度が再構築されつつあると言えよう。

本研究は、以上のようなメディカルツーリズムとしての不妊治療の新たな展開に坎がみ、その実態を明らかにするとともに、それを通して新たな親子・家族・結婚観ないし制度が生成している実態や可能性を実証的かつ理論的に検討するものとして開始した。

## 2. 研究の目的

本研究は、近年ますます盛んになりつつあるメディカルツーリズムとしての不妊治療(生殖補助医療)に注目し、現在世界的な規

模で進行している親子・家族・結婚観及び制度の変動の実態の一端を実証的な調査研究を通して明らかにすることを目的とする。より具体的には、研究期間内に主に以下の2つの研究を行うことを目的とする。

すなわち、第1に、生殖補助医療のグローバル化ないし国境を越えた不妊治療が近年メディカルツーリズムとして展開している実態を、タイやアメリカなどの斡旋業者や不妊治療クリニック・病院等の医療従事者、患者へのインタビュー等を通して明らかにする。また、第2に、現在世界的規模で進行している親子・家族観や制度の変動の観点から、メディカルツーリズムとしての不妊治療を通して新たな親子・家族・結婚観や制度が構築されつつある実態や可能性を理論的かつ実証的に検討する。

### 3. 研究の方法

本研究の目的を達成するため、1)メディカルツーリズムとしての不妊治療の実態に関する基礎的な資料の収集については、日本人患者(客)を中心として、主要な渡航先国であるタイとアメリカにおいてメディカルツーリズム斡旋業者や不妊治療クリニック・病院の医療従事者、不妊治療患者へのインタビュー調査等の現地調査を実施する。また、2)研究期間中に収集した資料を親子・家族・結婚観及び制度の変動の観点から分析し、メディカルツーリズムとしての不妊治療の当事者や斡旋会社、医療機関等の交渉を通して新たな親子・家族・結婚観や関係等が生成している実態ないし可能性を実証的かつ理論的に検討する。

### 4. 研究成果

(1)ポスト生殖革命時代の親子と家族について

生殖補助医療の進展に伴う近年の社会的・文化的変化を、特に親子と家族に焦点を当てて検討し、理論的な整理を行った。その結果、1978年の体外受精技術の実用化に端を発する「生殖革命」は、その技術を開発した生物学者ロバート R.G.エドワーズが2010年にノーベル生理学、医学賞を受賞するに及んで人類への貢献が世界的に認知され、それ以降、世界はもはや「ポスト生殖革命」の時代に入ったことを確認した。そして、ポスト生殖革命時代にあっては、一人の子どもがさまざまな文脈において同時に複数の母ないし父を持つことがあること(「多元的親子関係」)また、そうした多元的親子関係を持つ子ども介して互いに浸透する「相互浸透的家族」が形成されることを論じた。これらの成果は、「ポスト生殖革命時代の親子と家族」(2013年7月6日開催、第7回基礎法学総合シンポジウム)や『『社会的親』と『心理的親』 アメリカ及びカナダにおける法的な

親子概念の拡張」(2014年3月7日開催、日本生殖医学会倫理委員会第90回委員会報告)、「生殖補助医療から『家族』を考えるポスト生殖革命時代の親子、家族、結婚の観点から」(2014年07月26日開催、2014年度家族問題研究会シンポジウム「生殖補助医療と家族」(於・早稲田大学戸山キャンパス(文学部)36号館681教室)などとして口頭発表を行うとともに、「ポスト生殖革命時代の親子と家族 多元的親子関係と相互浸透的家族」(2014年3月刊行、『法律時報』86巻3号)等の論文として刊行した。

(2)メディカルツーリズムとしての不妊治療の実態について

本研究の一環として、日本人不妊治療患者(客)を主要な顧客とするタイ・バンコクのメディカルツアー会社、G I D (ブレンダ)を2013年と2015年の2度にわたり訪問し、同社の代表者ならびに不妊治療コーディネーターにインタビューを行い、タイにおけるメディカルツーリズム、特に卵子提供や代理出産等の不妊治療についての概要を聴取した。また、タイでは、タマサート大学社会学・人類学部を訪問し、先端的生殖補助医療が社会や文化に及ぼす影響に関心を持つ研究者(教員)らと懇談し、情報や意見を交換した。さらに、2015年9月、アメリカ・サンフランシスコを拠点とする不妊治療斡旋会社 I F C (International Fertility Center)においてインタビュー調査を実施し、日本人不妊治療患者(客)の提供卵子の利用や代理母を通じた子作りの実態を調査した。これらの研究成果については、調査データ等の整理や分析が終わり次第、随時公表する予定である。

(3)「共同養育」(co-parenting)という新たな子作りないし家族形成について

2015年9月、サンフランシスコに拠点を置く L G B T (Lesbian, Gay, Bisexual, Transgender)ないしクイア(queer)の家族形成を支援する N G O (Our Family Coalition)や L G B T 歴史博物館等を訪問してインタビューを行ったところ、同性愛者カップル等が精子提供者や代理母等の第3者と協力して子どもを作ったり子どもを育てるといった新たな試み、「共同養育」(co-parenting)を積極的に進めていることが明らかとなり、その概要を聴取した。帰国後(2015年9月)日本で、タイで性転換をして女性から男性になった日本人(FtM:Female to Male。当該者は戸籍上の性も男性に変更済み)にインタビューを実施したところ、彼はすでに結婚をし、提供精子を使って妻との間に子どもをもうけたが、その子どもを、時として、精子提供者である「友だち」と共に育てていると述べた。しかも、驚いたことに、そのことをごく自然ないし当然のことと

考えていた（インタビューに応じてくれた男性は、「これって、当たり前じゃあないんですか？」と述べた）。この事実は、「共同養育」という言葉（概念）自体はほとんど知られていないものの、日本においても「共同養育」がすでに「当たり前」のごとく実践されていることを意味する。また、そうした実践は、草の根レベルでじょじょにはあるが、日本の親子・家族・結婚のあり方を根本的に変革する可能性を持つと考えられる。以上の研究成果の一部は、2015年11月29日に天理大学で開催されたA J J (Anthropology of Japan in Japan)学会において、“This Is a Usual Thing, Isn't It?: Socio-cultural Implications of 'Co-parenting' Practiced by LGBTQs to Changing Family-Building in Contemporary Japan”と題して口頭で発表した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

上杉富之, 2014, 「ポスト生殖革命時代の親子と家族 多元的親子関係と相互浸透的家族」『法律時報』(日本評論社), 査読無し、86巻3号: 70-75頁。

〔学会発表〕(計4件)

Uesugi, Tomiyuki, “This Is a Usual Thing, Isn't It?: Socio-cultural Implications of “Co-parenting” Practiced by LGBTQs to Changing Family-Building in Contemporary Japan.” Paper presented at the AJJ (Anthropology of Japan in Japan) 2015 Fall Conference, on 29 November 2015, at Tenri University, Tenri, (Nara).

上杉富之, 「生殖補助医療から『家族』を考える ポスト生殖革命時代の親子、家族、結婚の観点から」2014年度家族問題研究会シンポジウム「生殖補助医療と家族」, 2014年7月26日, (於・早稲田大学戸山キャンパス(文学部)36号館681教室)。

上杉富之, 「『社会的親』(social parent)と『心理的親』(psychological parent) アメリカ及びカナダにおける法的な親子概念の拡張」日本生殖医学会倫理委員会第90回委員会報告, 2014年3月7日, (於: 東京・日本生殖医学会事務局会議室)。

上杉富之, 「ポスト生殖革命時代の親子と家族 多元的親子関係と相互浸透的家族」第7回基礎法学総合シンポジウム「親密圏と家族」講演, 2013年7月6日, (於: 東京・日本学術会議講堂)。

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕  
ホームページ等  
なし

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

上杉 富之 (UESUGI, Tomiyuki)  
成城大学・文芸学部・教授  
研究者番号: 00250019

(2) 研究分担者

なし ( )

(3) 連携研究者

なし ( )

(4) 研究協力者

なし ( )